

平成30年7月20日（金）  
平成30年度第一学期終業式 式辞

秋田県立本荘高等学校 校長 今井 智幸

しなやかな思考の枠組みを培い、未来を拓け

平成最悪の被害をもたらした西日本豪雨は、まだ若い命も奪い、犠牲者は200名を超え、終業式の予定も立たず、休校となった公立小中高校も、200校を超えました。日常性が破壊された被災地の凄惨な様子ばかりでなく、厳しい暑さにも見舞われている被災者の方々には、胸が痛みます。犠牲者の方々には、心からお悔やみを申し上げます。

今月5日の「全国大会、甲子園予選壮行会」で、スポーツ心理学の「マインドセット」の話をしました。その人が持っている経験や価値観に基づく考え方の枠組みや思考様式のことでした。ふだん、自分の考え方の枠組み、思考パターンをあまり意識したりしません。私たちはこの思考の枠組みに強く支配されています。この思考の枠組みのことを一般には「フレームワーク」、科学では知の枠組みのことを「パラダイム」と言います。現代文が難しく感じられるのは筆者とフレームワークが違うから、新しい単元の数学が難解に思えるのはそのような考え方をしたことがなかったから、つまり、そのような思考の枠組みをまだ獲得していないから、という言い方ができるかもしれません。日々の授業は、新しい考え方、見方のフレームワークにアップデートしているとも言えます。

この一つの固定観念とも言える「フレームワーク」に刺激を与える話を、いくつか紹介したいと思います。

「少子化、グローバル化、そして技術の進化。見通しの利かない『変化の時代』を私たちはいかに逞しく生き抜くか。」——そんなテーマについて、時代を代表する経営者と科学者が、ある雑誌で語り合っています。「ユニクロ」などを傘下にもつファーストリテイリング代表取締役会長兼社長の柳井 正 氏と、京都大学 iPS 細胞研究所所長の山中 伸弥 氏の対談です。

山中氏の「実験は失敗することがほとんどなんです。ですから失敗をすることを含めて目の前の実験を楽しめる人でないと研究者は続きません。」という発言に対し、柳井氏は「ほとんどの人が失敗を悲しいことだと考えますが、それは違います。僕は失敗するたびに、この失敗のなかには成功の芽があって、失敗はその芽を発見できるように僕に与えられたものじゃないかと考えます。（中略）失敗を本当に吟味して深く考えた人が成功するんだと思います。」と応えています。

失敗をどう考えるかで、失敗論は成功論へとつながります。

また、「人生なんて一瞬です。」と話す柳井氏に対して、「人生が一瞬というのはよく分かる考え方です。」と山中氏は共感し、親友だった元ラグビー日本代表の平尾 誠二 さんが2年前に53歳の若さでなくなったショックを語り、いまできることはとにかく手をつけようとしている、という現在の心境を述べています。

死について考察することをタブー視する傾向のある日本社会ですが、このやりとりに、ドイツの哲学者ハイデッガー（1889～1976）の『存在と時間』が頭をよぎります。ふだん、日常のあいまいさにひたって生きている私たちが、ふと不安におそわれることがあります。それは、いつかは分からないが、いつでも、確実に訪れる死の可能性です。ハイデッガーは、人は自分の死の可能性に直面する時、日常生活に埋没したあいまいな「ひと」（ダスマン）から、「自己の本来の生き方」、「本来の自分」に目覚める、と言います。だれとも交換できない、一回かぎりの、全体的な自己の存在に目覚める、と言うのです。

高校時代、無常観を説く古典を学ぶ時、人間のはかなさと悠久の歴史にとまどってしまふことがよくありました。若い時に、自己の生き方、在り方や人間の存在、そして人間と

自然、社会の関係について、考えを深めてみることは決して無駄ではないと思います。

次に、岐阜経済大学サッカー一部総監督 <sup>たかはし まさのり</sup> 高橋 正紀 教授のスポーツに対する考え方です。専門はスポーツ精神医学。3部リーグだったサッカー一部を2012年に全国大会に導いています。ドイツ留学中にサッカーの試合で勝った時、相手に「ありがとう。君の守備はすごかった」と感謝されます。自分を磨ける強い相手に出会えたという感謝の言葉です。しかし、日本では勝つことが一番で、相手を「敵」と表現します。勝たないと楽しくないという選手は、精神的に弱い傾向にあり、失敗を恐れ積極性を失ってしまう、と言います。試合で挽回できず崩れるのは、予想外の展開になった際、「自分が成長できる機会だ。挑戦しよう。楽しい」と考えられないからだ、と言うのです。

スポーツマンシップの基本は、「楽しむ」「自分が大切」と考えます。一番楽しい空間は、非日常の遊びであるゲームです。この空間を構成する自分、仲間、相手、ルール、審判を尊重する、つまり正々堂々と戦うのは「楽しむ」ためです。何かに挑戦し、やり抜くことで人は成長しますが、スポーツで戦い抜くのは、「大切な自分磨き」のため、と言います。指導するサッカー部の目標は四つ。優先度の高い順に、(1)授業の単位を取る (2)サッカーを4年間やり切る (3)アルバイトをする (4)高め合える恋人をつくる。

日常生活の中に大切にすることがあり、スポーツは非日常の遊びの空間であると認識する重要性を説いています。

最後は、人のよりよく「生きる力」も考えさせてくれる話題です。

今回のサッカー・ワールドカップロシア大会で、クロアチアの司令塔ルカ・モドリッチ選手は、決勝で敗れてなお最優秀選手(MVP)に選ばれました。チーム最年長の32歳は、誰よりも仲間のために走り、身長172<sup>センチ</sup>の体を張ってピンチの芽を摘み、多彩なパスで味方のチャンスを膨らませました。

モドリッチ選手は、華々しいキャリアとは対照的な幼少期を送っています。旧ユーゴスラビアから分離独立を宣言したクロアチアでは、1991年、クロアチア人と旧ユーゴで多数派だったセルビア人との間で紛争が勃発。祖父はセルビア人勢力に銃で撃たれて死亡、実家は放火されて全焼、一家は故郷を追われました。水も電気も来ていないホテルに身を寄せ、爆発音や銃声を聞きながら育っています。ホテルの小さな駐車場でボールを蹴っている時だけ、明るい未来を描くことができました。モドリッチ選手は、当時について「私と家族にとって非常に厳しい時期だった。過去を引きずりたくはないが、忘れることはできない」と語っています。

運命が与えた壮絶な逆境を乗り越え、誰もが認める、今大会の主役だったMFモドリッチ選手へのゴールデンボール賞授与に、試合会場は大きな拍手で包まれます。その拍手は、決してサッカー選手として優れていたことだけに送られたものではなかったはず。壮絶な運命を乗り越えてきた彼の生き方、そしてその生き方が反映された、人を勇気づけるプレーに対する惜しみない賞賛の拍手でもあったはず。

3年生の皆さんは、高校生活も残り少なくなってきました。能力は誰でも伸ばすことができるという「成長マインドセット」、できそうだと自分を信頼する感覚「セルフエフィカシー」を大切に、就職試験やセンター試験、二次試験をたくましく乗り越えて欲しいと思います。自分が試され緊張する場面でこそ、未来を拓く力を冷静に発揮するために、「豊かな人間力」と「確かな学力」を身に付けて欲しいと願っています。

1、2年生にも同じことが言えます。失敗や負けを恐れることなく、しなやかな「思考の枠組み」を、ぜひ豊かに培って欲しいと思います。また、チャレンジする主体性、自ら自己を律する自主自律、そして勉学や部活動で発揮する探究力、行動力を養うことが、高校生活を充実させ、皆さんの未来につながる力になります。

来年の3月1日、3年生の一人一人が第一志望を達成し、かつ人間的にも大きく成長し、ここ本荘高校の学び舎を巣立っていくことを、心から期待しています。